

今月も、日本にはない言葉です。

・>・>・>・>・>・>・

昔、王振という宦官がおりました。彼は常日頃、自分が持っている権限を利用して自分の力の拡大を図り、その勢力で更にうまい汁を吸っていました。朝廷が開かれるたびに、地方の役人は皆、彼の歡心を得ようと、様々なお土産を持ってくるのが常でした。

于謙うけんという一人の地方官僚がいて、いつもなんのお土産も持ってきませんでした。友人が彼を諫めて言いました。「たとえ高価なものでなくても、土地の名産、例えば線香、キノコ、ハンカチなどを贈って、誼よしみを通じておく方が良いぞ!」

すると于謙は笑って両袖をふりながら、ユーモアたっぷりに言いました。「土産物なんか持っていないよ、私の両袖には爽やかな風が吹き抜けるだけだ!」于謙はこのような方法で、一部の汚職官吏を皮肉りました。官吏が賄賂をとらず清廉潔白であることを示す、「两袖清風」と言う言葉はここから出たのです。

・>・>・>・>・>・>・

言葉の意味：両袖の中には清風以外、何もない。清廉潔白な官吏を指している。転じて、貧乏で財産が何もない時も使う。

使い方：祖父は一生涯教師を続け、退職した時、財産は何もなかったが、優れた教え子が沢山育てていた。

・>・>・>・>・>・>・

今回もまた、汚職をしない官吏の話ですが、日本にはこれに対応する言葉は見当たりません。勿論、日本にも汚職や贈収賄はありますね。日本で特徴的なのは「付度」という贈賄です。「付度」を受けた方は、頼んだわけではなく先方が勝手に「付

度」をしたのだからと知らん顔、収賄の意識はありません。「付度」された人が、甲乙つけがたいA案とB案の選択を任された時は、「付度」してくれた人が関わったA案を選択するでしょう。

若しかしたら、A案はB案より少々劣るかも知れないけれど、あの時「付度」してくれたのだから、ここではA案を選択しようと「付度」するかもしれません。こうなれば立派な贈収賄ですが、立証することは難しいですね。

これに対して、昔の中国では半ば公然と贈収賄が行われていたようです。社会的なしくみもそれを助長したのでしょう。一族が纏まって生活している中で、優秀な子供が生まれると一族を挙げて勉強を支援し、科挙に受かって役人に成るのを援助します。役人に成った子供は、世話になった一族の人々に出来る限りの恩返しをします。中国で役人に成ることは、ステータスが一段も二段も上がることで、お金がもうかり、職務に応

じた権力も手に入り、それらを使って一族に便宜を図ることは、特に阿漕なことをしない限り、社会的に容認されたことだったようです。

北京で生活していた頃、テレビドラマで、清朝最盛期、乾隆帝のお気に入りの官僚の収賄の話を見ました。皇帝の寵愛を笠に着てやりたい放題、最後には地方から皇帝への贈り物である素晴らしく大きな玉を巧妙な方法ですり替えて、自分の家の庭へ運んでしまう話で、汚職もこんなにスケールが大きいと痛快感を覚えました。

この収賄官僚は和珅わしんと言って、乾隆帝の晩年から嘉慶帝の初めまで、清朝政府の大臣を務めた人です。彼の邸宅は死後没収され、現在は、保存状態の良い王府として有名な、什刹海じゅうさつ付近の観光名所の一つ恭王府博物館となっています。

中国は汚職のスケールもけた違いです。



満
柏
氏

挿絵：満柏氏